

志苔館(国の史跡, 続百名城) (函館市志海苔町, 赤坂町)

志苔館（しのりたて）は、北海道函館市に所在する中世城館跡（日本の城）。小林氏によって築かれたとされる道南十二館のひとつ。国の史跡に指定されている。

立地

西には旧志苔川があり、東は溪沢に連なっており、南方は海に面した丘陵上に立地する。

遺跡概要

1983 年から 1985 年にかけて函館市教育委員会によって発掘調査が行われた。

館跡は、自然地形を活かし、四方に土塁と薬研または箱薬研状の空堀が巡らされ、全体でほぼ長方形の形状を呈している。内部は東西約 70-80 メートル、南北約 50-65 メートルで、約 4,100 平方メートルの広さがあり、曲輪の内部では掘立柱建物跡や井戸が確認されている。土塁の高さは、北側で約 4.0-4.5 メートル、南側で約 1.0-1.5 メートルであり、土塁の外側にあたる北側と西側には幅約 5-10 メートルの空堀が設けられ、最も深い所で約 3.5 メートルの深さをもつ。

発掘調査では、15 世紀前半ごろを主体とする青磁・白磁・珠洲焼・越前焼・古瀬戸などの陶磁器が出土している。これらの遺物の年代は『新羅之記録』に記された長禄元年のコシャマインの戦いにおける志苔館陥落の時期（1457 年）と矛盾しない。

史跡指定

1934 年（昭和 9 年）8 月 9 日、国の史跡に指定された。

腰曲輪、濠、溪沢全体に指定地が及ぶようにするため、1977 年（昭和 52 年）4 月 27 日に追加指定がなされている^[1]。

中国銭の大量出土

1968 年、志苔館の南西方向 100 メートル地点から、埋納されたと推定される越前焼、珠洲焼の大甕 3 個の中より計 38 万 7,514 枚におよぶ、主として中国の銅銭が出土している。これは日本国内で 1 か所から発見された古銭としては最大級の量である。「北海道志海苔中世遺構出土銭」として国の重要文化財（考古資料）に指定され、市立函館博物館に所蔵されている。

Wikipedia による

志苔館跡

14 世紀頃蝦夷地に渡来した和人が築いた 12 の館（たて）の中で最も東端に所在する「志苔館」。1968 年には付近から多量の古銭の入った甕が出土。函館空港に近い。国指定の史跡。

蝦夷地に渡来してきた和人が 14-15 世紀頃に築いた館（たて）のうち、松前藩の史書「新羅之記録」に記されているように、学術上で存在が認められているものを総称して「道南十二館」と呼びます。その範囲は、現在の上ノ国町から松前町、福島町、知内町、木古内町、北斗市、函館市に及び、それらの中で最も東端に所在するのが「志苔（しのり）館」です。

函館市内中心部から、国道 278 号を恵山方面へ。湯の川温泉街を過ぎて間もなく、左手に現れる看板を頼りに進むと、函館空港脇の現地にたどり着きます。緑の芝生が一面に広がる海拔 25 メートルの小高い丘からは、白波立つ津軽海峡を見下ろすだけでなく、町のシンボル・函館山が海に浮かんでいるかのような姿を望むことができます。

館跡は、広さ約 4100 平方メートルのほぼ長方形です。周囲は最大 4.5 メートルの高さがある土塁、さらにその外側には空壕が巡らされています。郭内に足を踏み入れると、門跡、建物跡、柵跡、井戸跡が石札に表示されているとともに、遺構に沿って埋めてあるブロックでその形状をうかがい知ることができます。

